

「詩学」の《平準化》,あるいは「平準化」の《詩学》

——'Linguistic Criticism'からの挑戦——

赤 岩 隆

要旨 十八世紀のイギリスに、いわば「庶出」のジャンルとして生まれた小説は、育ちのよい詩や劇とは対照的に、いわゆる「古典」の伝統に連なる固有の「詩学」というものを持たなかった。ということはつまり、アリストテレスが、当然のことながら、小説については何も言っていないということなのであるが、以来二世紀以上の長きにわたって、ジャンルとしての小説を論理的に体系化しようとする試みが様々に模索されてきた。本稿においては、そのような小説の「詩学」というものの確立をめざした試み全般と、Roger Fowlerの'linguistic criticism'というものとの関係について、広い意味における「文体論」の立場から考察されている。

1

議論を始める前に、あらかじめ確認しておかなければならないことが、二つある。第一に、本稿において'linguistic criticism'と言う時、イギリスの言語学者 Roger Fowler 一人の批評上の試みを指すということについて、当然のことながら、そのような限定をするのには理由がある。すなわち、'linguistic criticism'というのは、確かに厳密な意味においては、明らかに「文体論 ('stylistics')」の範疇に属しており、それについては、実際 Fowler 自身も認めていることなのではあるが、それでいて同時に彼は、そういった自らの試みを、'stylistics' という名称のもとに完全に従属させることに対して執拗に抵抗を示している。要するに、彼にとっての'linguistic criticism'というものは何よりも、いわゆる'stylistics'と呼ばれるもの全般に対する、彼独自の「意義申し立て」を意味するものに他ならないと考えられるのである。少なくとも本稿における議論はすべて、そのような認識を前提にして進められている。

第二に確認しておかなければならないことは、本稿において議論の焦点となるのが、Roger Fowler の'linguistic criticism'というものと、「小説」という特定のジャンルとの関係に対してであるということについて、この場合の限定にも、それなりの理由がある。Fowler 自身も言っているように、小説という形式には詩の場合とは異なって、「直接テキストに近づけるといふ利点」が本来的に欠如しており、従って、「構造上の予測可能性」という点に関して、「弱くて不正確」な情報しか提供してくれない。それ故、文体論においては、伝統的に詩よりもはるかに小説の方が、対象としては“problematic”な存在となっており、その結果、ジャンルとしての小説に対する個々の理論の有効性が、すなわち、その理論全体の有効性を試す、いわば「試金石」となっているとも言えるのであるが、Fowler がその一連の活動を通してより積極的に挑んでいるのも、実は文体論のそういった側面に対してなのであり、従って、以下における我々の議論は必然的に、小説の文体論に対する、'linguistic

criticism' からの新たな挑戦という焦点をめぐって展開することになるのである。

2

本論に入る前に少しだけ復習をしておこう。言語学者による、狭義の意味における文体論にとって、その展開の決定的なターニングポイントとなったのは、Noam Chomsky の著書、*Syntactic Structures* (1957) の出版であった。Chomsky の、この著書は、従来の言語学分野に「変形」という新しい概念を導入することによって、周知のとおり、以後の言語学の進む方向を大きく変えてしまったのであるが、いわゆる「変形生成文法」と呼ばれるものは、文体論という、言語学から援用してきた理論的概念や分析的技法を文学批評に適用するのを基本とする分野にも、同様にして多大な影響を与えることになった。その影響は、いつものことながら、まずは詩のジャンルにおいて着実な成果を残して、早くも1970年代の始め頃までには、主要な著作のいくつかが出揃うまでになった。一方、小説のジャンルにおいては、詩に比べてその適用は遅れたのであるが、同じく70年代には、これから論じる Roger Fowler その人も含めて、例えば 'New Criticism' においてそうであったように、詩における研究の成果を自らのアプローチのパラダイムの基礎に据えることにより、小説のための新しい文体理論を確立しようとする動きとなって現われたりしている。

文体論の流れを変えたのは、何も変形生成文法ばかりではなかった。たとえば、Saussure の影響を受けて生まれたフランス構造主義とか、あるいは、戦後再評価されたロシア・フォルマリズムや、その出身で、音韻に関する革命的な研究により、構造主義を推し進めた Roman Jakobson もまた、見逃せない、ある意味では変形生成文法以上の貢献を文体論に対して残している。特に、彼らの中には、言語学者=文体論者たちとは異なり、小説というジャンルにその誕生以来欠けていた、いわゆる「詩学」というものの確立をめざした重要な考察を試みる者たちが含まれており、そして実際、それらの考察は、Chomsky の提案した概念と同様に、文学への言語学的接近全般に対して広く影響を与えたのである。

大まかに言って、Roger Fowler が文体論者として育ったのは、そういった環境においてであった。従って、彼の研究も、例にもれず最初は詩からスタートしており、また、その批評の方法についても、様々な点で他の文体論者たちとの小さな意見の食い違いを見せてはしているものの、活動の枠組自体は、決して変形生成文法や、あるいは、構造主義やフォルマリズムの範囲内からは出ていない。実際彼がそれらの域外に出ようとし始めるのは、更後のことであり、それについての議論をする前に、彼の著作の中から彼が小説と言語学との関係に対して示した最初のまとまりある試みの一つとして、*Linguistics and the Novel* (1977) を取り上げておくことにする。

3

Linguistics and the Novel は、1950年代後半以降、Fowler 自身が続けてきた勉強の成果に関する、いわば「総まとめ」ともいうべきものである。つまり、彼は、言語学と文芸批評、あるいは、言語学と構造主義といった具合に、小説の文体論と他の関連性ある諸理論との交差点に立って、それらの間の頭のよい交通整理をしようとしているのであるが、その目標は

というと、「新しい方法の序論的説明」を試みることに、すなわち、小説の「詩学」としての、いわゆる 'text-linguistics' というものを将来的に確立するための地ならしをするということにあった。従って、彼は、そこにおける自らの態度というものについて、「極度に折衷的」であると言っている。つまり、方法としては、変形生成文法をはじめとした、'sentence-linguistics' のそれをモデルとして採用し、精神としては、広い意味における 'New Criticism' や、あるいは、フランス構造主義の 'narratology' とか、ロシア・フォルマリズムの同様の試みとかといったものと連同しようとしている。要するに、一方においては、'New Criticism' の技法に対する絶対重視の精神といったものを、また、他方においては、構造主義やフォルマリズムの一見して機械的にすぎるとも思えるほどに合理的な形式主義の精神といったものを、あくまでも自らのアプローチの基礎に据えながら、「類推」という便利な道具を使用することにより、「文言語学」全般の方法を、小説の文体論に対して「援用」しようというのである。

援用の基礎は、簡単に言って、次のような仮定に依っている。すなわち、「テキストは、(文から構成されている同時に)、構造的に文に似ている」、要するに、「(両者とも) 構成原理は同一」であると無理なく考えられ、従って、「(言語学において) 個々の文の分析に提案されている構造の範疇」というものは、文よりもはるかに大きなテキストという構造の分析に対しても拡大され得るはずである」という仮定にであるが、そのようにして言う時、Fowler の頭の中に想定されている「構造の範疇」というものは、おおよそ次のようなものである。

a **sentence** has a **surface structure**
formed by **transformations** of a
semantic deep structure consisting of a
modality component plus a **propositional** component
the latter based on a
predicate attended by one or more **nouns**
in different **roles**

“surface structure” (「表層構造」) というのは、「文の観察可能な表出された層」、最も具体的には「音と文字」、もう少し抽象的に言えば「統語法」、つまり「語や句の配列」のことを指し、他方、“deep structure” (「深層構造」) というのは、「文の抽象的な内容」、つまり、文の観察不可能な層にある「意味の構造」のことを指し、従って、一個の文において我々が直接に体験することができるのは、「表層構造だけ」に限られ、「深層構造」の体験、つまり、「意味の取り出し」については、「コード解読という複雑な行為」を通して行われることになるのであるが、そのような二つの概念の対立というものは、同時に、文芸批評において伝統的に取り扱われてきた、形式と内容というもう一つの二項対立と理念的に対応している。要するに、Fowler がその確立をめざしている 'text-linguistics' というものの実体とは、「変形」によって与えられる、「表層構造」という可視的な形態を通して、「(意味の) 深層構造」という不可視的な形態へと至る、「コード解読の詩学」とでも呼ぶべきものであり、そして、文体とは、すなわち、それら二つの構造の対立する関係のうちに成立するもののことを指すのである。

以上が、*Linguistics and the Novel* において提案されている、新しい理論の構想に関する輪郭である。上記援用のための仮定の結果として、一個の文が、いくつかの語による統一ある配列から成ると同じシステムで、テキストという一個の「文」は、あらゆる面において、文という「語」の統一ある配列から成ることになるのであるが、そして、これこそが、'text-linguistics' というものの理論的な構想において、いわばその「一般原則」として働いている基本的なアナロジーであると考えられるのであるが、そのようなアナロジーに従って拡張可能な分析技法に関する具体的な議論に先立って、Fowler は、文構造における用語と、テキスト構造におけるそれとの混同を避けるため、次のようにして用語の置き換えを行なっている。

Sentence	Prose fiction
surface structure	text
modality	discourse
proposition	content

“modality” というのは「法性」、すなわち、「発話の命題的内容 (“proposition”) の価値・妥当性に対する話者（書き手）の態度・関係」、およびそれに付随して、「発話行為の向けられるすべての人と話者との関係」といったものを意味している。そして、物語の次元におけるそのような「法性」については、あくまでも「類推」作業の「便宜上」、特に“discourse”と呼ぶことにすると言うのであるが、より具体的には、例えば文学作品における「視点」の問題などに対して適応価値があると考えられている。

続く二つの章で、Fowler は、上記のように置き換えられた三つのカテゴリーのうち、“text” と “discourse” だけを特に取り上げて議論を進めていく。語りの分析にあってはとりわけ重要であるとされる、“content”，すなわち、「文」としてのテキストにおける“proposition”の問題に関して積極的に取り上げられないことについては、単純に、肝心の「文言語学」における類似の研究が十分に進んでいないからであり、従って、その方面へのアプローチの将来的な具体像については、例えば Propp や、あるいは、Greimas, Barthes といったフランスの構造主義者たちのすでに行なっている「深層構造」の定式化を、より一層進めたものになるだろうと示唆するだけにとどまっているのであるが、それぞれ 'TEXT', 'DISCOURSE' と題された二つの章に関しては、ここでその内容を一々取り上げて云々する必要はないように思われる。なぜならば、そこにおいて議論されているのは、例えば、情報の仲介者としてのテキスト体験の再現法とか、いわゆる「視点」としての“modality”の問題とか、あるいは、Booth や Bakhtin の「声」の理論の問題、そして更には、Fowler 自身が“mind style”と呼んでいる、作者、語り手、登場人物といったものの世界観に関する、「示差的な言語表出」の問題へと至る、もっぱら将来的な装備についての断片的な提案でしかないからである。要するに、*Linguistics and the Novel* にあるのは、あくまでも「序論的説明」、すなわち、理論の輪郭だけであり、間を埋める作業のほとんどすべては後に残されたままなのである。そういった作業の中でもとりわけ重要であるとみなされるのは、いわゆる「変形」に関する研究であるように思われる。なぜならば、「変形」という概念は、「コード解読」という作業を行なう上でその中心となるべきもの、つまり、「表層（形式）」と「深層（内容）」とを結ぶ、文体という「橋」そのものを指す関係に他ならないからである。Fowler によれば、

文構造における「変形」というのは、一つには、そして、その最も重要な意味においては、「(文の) 実現規則」、つまり、「一連の秩序づけられた構造変化により抽象的な意味を表層構造へと変換する」、そのための規則のことを言うのであるが、他方物語の次元においては、言説をめぐって存在している、「表現上のコンヴェンション」というものに相当していることになる。要するに、Fowler にとっての、物語の次元における「変形」の研究とは、その根底において、言説についての「社会言語学的」な研究へと通じているのであるが、しかし、ここでも Fowler は、第四章の最後の節でそのような研究の例として、わずかに Bernstein の「精密コードと限定コード」という区別に触れたりしているものの、それ以上のことに関して、同じく今後の研究の方向を示唆するのみに終わっている。

以上、*Linguistics and the Novel* に関して我々が注目しなければならないのは、もちろん、Fowler の議論のいずれもが提案のみに終わっているということに対してなどではない。なぜならば、その原因の大半が、扱うべき問題の大きさ故に、あるいは模索中であつたりとか、あるいは「本書の範囲を越えるもの」であつたりとかするためであることは明白だからである。我々が注目すべきなのはそういったことではなくて、Fowler がその議論の末に到達している地点に対してである。つまり、彼が、小説の「詩学」追求の試みのスタートとして、まず第一に Chomsky の変形生成文法というものを取り上げておきながら、最終的にはそのアンチテーゼとでもいうべき、「社会言語学 (“sociolinguistics”)」というものに到達しているということに対してである。というよりも、問題はむしろ、自らの議論がそのようにして進んでいることに対して、彼自身が少しも矛盾を感じてはいないということにあるのかもしれない。要するに、彼は、変形生成文法という、「文」の内側に閉じ込めることを基本原則とする方法と、社会言語学という、それとはまったく正反対に、「文」の外側からのアプローチというものを第一の目標とする方法とが、「詩学」という、統一されていしかるべきであるはずの一個の体系内において、何の無理もなく両立し得るものとみなしているのであるが、この点彼の考え方が、過度の理想論に走り過ぎた結果、自家撞着に陥っているということは明白である。なぜならば、アンチテーゼというものは、本来両立しないこと自体においてこそ存在の意義があると言えるのであり、要するに、それらは、自らの片割れの存在というものを否定することにより、始めて自らが弁証法的に肯定されるといった類いのものであるはずだからである。そして、実際そういった矛盾こそが、そうならざるを得なかったという意味において、いわゆる ‘linguistic criticism’ というものの以後一貫して抱え込むことになる最大の問題なのであり、そして、同時にそれはまた、文体論全般に対する、‘linguistic criticism’ からの独特の「意義申し立て」ともなっていると考えられるのであるが、そういったことに関する詳しい議論については、更に先の話として置いておくことにして、次に、我々は、*Linguistics and the Novel* のほぼ十年後に出版された、彼の最も新しい著作の一つである、*Linguistic Criticism* (1986) について見てみることにしよう。

4

Linguistic Criticism において、その批評の枠組の中心となって機能しているのは、*Linguistics and the Novel* におけるような、“deep structure” と “surface structure” の対立とか、あるいは “transformation” とかといった概念ではなくて、もともとはロシア・フォルマ

リズムの批評用語であった，“habitualization”と“defamiliarization”という一組の対立概念である。まず最初に、Fowlerは、「世界は言語範疇により表現されたものであり、決してその逆ではない」という、Edmund Leachの言葉を引用する。これは一般に受け入れられているとされる考え方、つまり、「世界には最初から自身の構造というものが備わっていて、言語はそこからあたかも鏡に映すごとくに、受動的にその意味を引き出す」といった考え方を否定して、「世界には何らもともとの構造などといったものなどはなく、あるのは、人間が言語の影響を受けてそれが持っているとは錯覚している構造だけなのだ」ということを主張しているのであるが、Fowlerにとっての、批評原理としての“habitualization”と“defamiliarization”という概念の対立は、実際その根本においては、そのようにして、そのもともとの出所であるロシア・フォルマリズムの枠組を越えたところに成立している、言語（世界）観からこそ由来しているのである。

まず第一に、言語は世界が持っている諸々の特徴を分類して、一つのまとまった構造とするのであるが、その際言語は、さもないと複雑すぎて人間が圧倒されてしまうような世界の様相を、その中で人間が機能的に生きられるようにして分類を進めていく。つまり、簡略化をするのであるが、そのお陰で人間は、日常生活において出くわす多様すぎる経験に対して、それらを「範疇」の一例として理解することにより、やっと思考し、また互いにコミュニケーションすることができているのである。しかしながら、そういった言語範疇の「経済性」には、一つの危険性が付随している。すなわち、「範疇」というものは、いずれにしろ一種のタイプでしかなく、従って、容易に形式化してしまうものなのであるが、結果として、それに基づくしかない人間の思考や認識もまた、容易に無批判的になってしまうという、“habitualization”の危険性がである。

そのようにして、それなしではやっていけないという意味において、言語は一種の必要悪であるとも言えるのであるが、人間が言語を通して周囲の世界や自らの仲間と触れ合っているという事実は、認識や思考の「日常化」といったこと以上に厳しい代償を、実際人間に対して要求している。すなわち、俗にいう「イデオロギー」や「世界観」や「理論」といったものはすべて、所詮はリアリティに関する「解釈」でしかないということ。もちろん、それらが、人間の文化や社会生活にとって大いに役立っているということは、確かに事実なのであるが、それだからこそ問題はより深刻になってしまうのである。つまり、それらのもたらす安定性というものが原因して、人間はそれらが現実というものを、自然かつ客観的に反映しているといった誤った結論に到達し、いわばそこに安住してしまう。要するに、これこそが、いわゆる「常識」というものの正体に他ならないのであるが、真実はそれが一つの「社会的コンヴェンション」、一種の「社会的な次元における虚構」にすぎないということを示しており、もしそう見えないとしたら、それこそ知覚や反応がすでに盲目的で自動的になっているということの証拠なのである。そして更には、そのような知覚や反応の自動化といったものは、時としてもっと恐ろしい結末へと通じることにもなる。つまり、もはや人間は、言語の意味とか構造とかといったものについて、一々反省したりはしないのであるが、それらはもともと、ある時代のある社会における、「権力階層」の利害に貢献すべく諸々の役割を担っているものであり、すなわち、人間が道具としての絶対的な信頼を寄せて疑わない言語というものは、実は世界を自然のままに映し出してくれるどころか、それを悪意に満ちて「歪曲」し、そしてまた、そうすることにより、ごく少数の者の利害を大多数の者たちのそれに

優先させる、そのための便利な道具として機能するものとなり得るものなのである。

結果として、「社会的な次元における言語使用」というものに関して積極的にコミットする、一種の「批評活動」というものが必要となってくるのであるが、要するに、そういった批評活動こそが、「芸術（文学）」、および、‘linguistic criticism’ というもののまず第一に負っている、“defamiliarization”という使命なのであり、すなわち、それらは互いに協力して、「できるだけ多くの言語使用者」が、上記のような「状況を認識」し、そしてまた、それに対して「自意識的な抵抗」を示すように仕向けなければならないのであるが、より具体的に言えば、それら使命は、“uncoding” = “encoding”という複雑な同時作業を通して達成されることになる。つまり、「記号とその文化的相対物との受け入れられた結び付き」というものを壊すと共に、それら従来からある記号に対して、新しい意味内容を結合し、なおかつ同時にその結合自体の「妥当性をも保証する」ことにより、結果として読者自らが「イデオロギー」を始めとした、「存在している諸々のコンヴェンション」に対して、それらを「疑問視」し、自発的に「再分析する」ように指導するのである。

以上のようにして、“habitualization”と“defamiliarization”という二つの概念の対立に、‘linguistic criticism’ というものの批評原理を求めた Fowler は、そういった立場に立って以下の議論を進めていくのであるが、ここまでくればそこにおいて展開されている議論の内容が、十年前に出版された *Linguistics and the Novel* のそれからはもはや遠く掛け離れてしまっているということは、容易に想像できるはずである。まず第一に、上述のごとく、いわば「テキスト外」における言語の働きというものに対して特に注目をする、‘linguistic criticism’ という基本定義をしたのであるから、今や批評の主な枠組を提供してくれるものが、かつてと同じようにとりあえずは変形生成文法であるというわけにはいかなくなってしまっている。それが証拠に、ごく当然の展開として、第七章においては、いわゆる“context” というものの基本的なありさまについて調べられ、また、それに続く第八章においては、今や分析技法として極めて有効であるとみなされることになった、‘pragmatics’ や ‘speech act’ の方法を積極的に援用しながら、文学をも含んで存在している、より広い社会的な“context”における言語的諸関係のモデルとなるべきパターンを見つけ出そうと試みたりしているのであるが、その際理論の枠組として役立っているのは、変形生成文法などではなくて、それら援用と理論と密接に係わっている、社会言語学であるということになる。同時に、*Linguistics and the Novel* において基本的な研究態度という点で強く連同していたフランス構造主義もまた、今や完全に圏外に去ることになる。例えば、構造主義が、Chomsky の“linguistic competence” という概念に基づいて主張してきた“literary competence” というものに対しては、そのリアリティに関して完全に否定をして、新たに“sociolinguistic competence” という概念を提示しているのであるが、そういった変更こそは、‘linguistic criticism’ というものが、構造主義の、いわゆる「構造」というものの追求を通して、殊更に批評を「テキスト内」に閉じ込めてしまおうとする、そのそもそもの態度からすでに遠く掛け離れてしまっているということの何よりの証拠であると言える。他方、ロシア・フォルマリズムに対しても、同様にして、‘linguistic criticism’ というものは、もはや理念的に遠く離れてしまっていると言わなければならない。上で見たように、ここで批評の理論的な核となって機能しているのは、確かにロシア・フォルマリズムから援用してきた、“habitualization”と“defamiliarization”という一組の対立概念なのであるが、それらに対し

てさえも、それらがもともと持っていた芸術至上主義的な意味合いといったものに関しては徹底的に剥ぎ取ってしまうなど、実際、社会言語学的な立場に立った重要な修正が加えられていることを忘れてはならないし、それについては、例えば第九章において、いわゆる「視点」の問題について議論をする際に、*A Poetics of Composition* における、Uspensky の「テキスト内」的な分類に依存しながらも、自らの議論の究極的な目標としては、「視点」と「イデオロギー」との、「テキスト外」における関係に対して集中しているといった事実からも容易に首肯けるはずである。

以上、我々は、'linguistic criticism' というものの理論的な出発点と、現時点におけるその到達点との間にある「隔たり」といったものについて調べてきたのであるが、そのようにして、「テキスト内」的な、いわゆる「コード解読の詩学」としての 'text-linguistics' というものの探求から、それとはまったく正反対の、「社会的な次元における言語使用」というものに関して研究をする批評活動の追求へと彼を向かわせたものとして、Fowler 自身、*Linguistic Criticism* の最終章の冒頭において、それより5年前に出版された、*Literature as Social Discourse* (1981) という自らの著書における考察に対して言及している。従って、次に、我々は、*Literature as Social Discourse* を取り上げて、そこにおいて認められるはずの彼の理論的変遷というものについて、更に詳しく調べていくことにする。

5

Literature as Social Discourse に関してまず第一に注目しておかなければならないことは、その中で Fowler が、Roman Jakobson とその有名な論文、'Closing Statement : Linguistics and Poetics' (1960) を特に槍玉に上げて攻撃し、そのアンチテーゼとして自らの理論を展開しているということに対してである。すなわち、Jakobson とその論文の、"objective fallacy" と "poetic language' fallacy" という二つの「誤謬」をめぐる論じられていくのであるが、"objective fallacy" というのは、文学を、内なる定義と統一性を備えた、自律自足している一つの「客体 ("object")」とみなす考え方であり、それに基づけば個々の文学作品というものは、「歴史の外側」に、「社会とは無関係」なものとして存在しているということになる。つまり、文学に関しては、いわば「それ自体」として扱われなければならないとする、「誤謬」のことを指す。他方、"poetic language' fallacy" というのは、文学に、それ独自の「特別な言語」の存在を認める態度のことであり、つまり、文学の言語というものは、通常の日常的でくだけた言語とは、そもそも「体系的に異なっている」とする、「誤謬」のことを指す。そして、そういった態度・考え方を代表しているのが、Fowler によれば、Jakobson と彼の上記論文であるということになるのであるが、その論文におけるそれら誤謬の最も明白な現われとして、Fowler は、Jakobson の提案している言語伝達に関する機能論について取り上げ、それに対して、次のように批判を加えていく。すなわち、言語伝達の複雑さについては、その構成要因に関して6個の要素から成る包括的な枠組を設定するなど、基本的には正しく認識されていると考えられるのであるが、そういった枠組から肝心の伝達機能に関して演繹をする際に、Jakobson は、6個の構成要素のそれぞれを、同じく6個の言語機能それぞれにおいて、過度に「前景化」してしまっている。例えば、言語の「詩的機能」について見て

みると、それを‘MESSAGE’という特定の構成要因に対して殊更密接に結びつけ、結果として、実際の分析においてはその理論的な主張とは裏腹に、それを他の要因からほとんど完全に切り離してしまっている。要するに、Jakobsonにおいては、言語伝達機能それぞれが、言語伝達行為の構成要因それぞれに対して、極めて排他的な対応関係に置かれているということになるのであるが、しかしながら、そういった結末はというと、実際、機能論に関するJakobsonのもともとの発想からして、決して必然的なものであるというわけではなく、彼が先入観としてすでに強固に抱え込んでしまっていた二つの誤謬、すなわち、“objective fallacy”と“‘poetic language’ fallacy”というものによってもたらされたもう一つの「誤謬」に他ならないと、Fowlerは言うのである。

以上のような批判は、当然のことながら、Jakobsonの「詩学」の提案そのものに対する評価にまで波及することになるのであるが、それについては、Fowlerは、Jakobsonの「詩学」が言語学に対して持っている、「誤った」関係として捉え論じている。すなわち、Jakobsonの「詩学」においては、“literariness”（「文学性」）というものが、言説としての文学の本質について、それを「普遍的」に特徴づけるものとして想定されており、従って、個々の文学作品はというと、第一義的には、その具体的な「実現」として存在しているということになるのであるが、Fowlerが批判しているのは、そういった考え方の出所としての言語学との関係に対してなのである。つまり、“literariness”という概念は、変形生成文法の、いわゆる「普遍」研究の態度から、極めて安易でメタフォリカルな「類推」に基づいて、引き出されたものにすぎないのではないのかといった具合にである。要するに、Jakobsonの「詩学」というものの実体とは、「自らの定義というものに関して、（盲目的に）言語学のイメージに頼り、また、言語学の適切さと能力とを自明のものとして受け入れて、その結果として、少なくとも言語芸術に係わっている限りにおいては、詩学は自動的に正当化される」とする、「単純で無批判的な依存」といったものを前提としているにすぎないということになるのであるが、ところが実際はというと、それが自らの地位を主張するために利用している基盤としての「言語学」というものは、それ自体からして決して完璧なものなどではなく、それどころか様々な面で「不具」の状態にあるのであって、当然のことながら、一個の独立した体系であるべきはずの「詩学」とすれば、それに対して、常に「相互批判的」でなければならないはずであると、Fowlerは言うのである。以上のようなJakobsonに対する批判は、言うまでもなく、Jakobson一人だけにとどまったりはしない。なぜならば、Jakobsonは偉大であり、その影響力はというと、フォルマリズムから構造主義全般にまで及んでいるからである。すなわち、Jakobsonの陥っている誤謬とは、要するに、フォルマリズム・構造主義全体が陥っている誤謬であるということになり、従って、例えばGreimas, Todorov, Barthesといった批評家たちの試みている、いわゆる「生成的（“generative”）」な、小説の「詩学」へのアプローチといったものもまた、必然的に同様の批判に晒されているということになってしまうのである。

ではFowlerが、Jakobsonやその同調者たちの方法のアンチテーゼとして提出している理論とは、一体どういったものなのであろうか。理論の要点は‘Literature as Social Discourse’というタイトル自体に簡潔に表明されている。つまり、「社会的（“social”）」な存在としての文学ということと、「言説（“discourse”）」としての文学ということである。まず第一に、Fowlerは、彼が“objective fallacy”と呼んで非難した、Jakobsonらによるいわゆる

“objectivism”に対抗させて、「文学というものは一個の社会言語学的事実である」と言う。つまり、Fowlerによれば、文学というものは、「静的」な「対象」といったものではなく、それとはまったく正反対に、一種の「動的」な「プロセス」、しかも、「社会的なプロセスの一環」として成立しているもののことを指す。すなわち、文学とは、「一つの文化によって制度的な価値を有し、また、様々な機能を果たしていると認められたもの」として成立しているものであり、従って、「社会とは無関係」なものであるどころか、そのそもその由来はというと、ある時代の、ある特定の社会における、「文化的経済的な構造」自体にこそあると言えるのである。要するに、これが、Fowlerの言う「社会的 (“social”）」なものとしての文学という定義の意味なのであるが、とすれば、結果として“text”というものの概念もまた、その意味内容について、大きく様相を変えざるを得なくなる。つまり、今や“text”というものは、いわば外側に向かって開かれているもの、「発話に限らず、意識、イデオロギー、役割、階級といった、言語使用者間に存在している諸々の関係をとりもつもの」であるということになる。そして、そのようにして理解された“text”というものを、Fowlerは、その「絶対的」な意味において、“discourse”と呼んでいるのである。

以上のようにして文学というものについての定義づけをし直したFowlerは、そのようなものとしての文学の、あらゆる面にわたって説明をする理論体系のことを、「社会言語学的詩学 (“sociolinguistic poetics”）」、あるいは、「社会言語学的文体論 (“sociolinguistic stylistics”）」と名付けて、そして、そのような今はまだ準備段階にしか達していない理想に向かって文体論を、現段階において最もよく導いてくれそうに思われる研究者の一人として、文法理論の、いわゆる「機能主義 (“functionalism”）」の中心人物である、M. A. K. Hallidayの名前を挙げる。Hallidayの機能主義によれば、「言語の文法的なシステムによって取られる個々の形式というものは、言語が奉仕するように要求されている諸々の社会的個人的必要というものに密接に関連づけられている」ということになるのであるが、そのようなものとしての言語全般を捉えるために、Hallidayは、三つの言語機能を指定する。つまり、“ideational function” (「観念化機能」)、 “interpersonal function” (「対人関係機能」)、 “textual function” (「テキスト形成機能」)の三つであるが、それら三つの機能それぞれは、いずれもあらゆるテキストにおいて認められるものであり、しかも何らかの形で、「同時」に働いているものとして想定されている。この点Jakobsonの機能論における考え方とは決定的に異なっているのであるが、そのようなHallidayの機能論に対して彼が特に注目をしているのは、彼の「詩学」の完成のためには、どうしても欠かすことのできないもう一つの理論との連合要請により起因している。すなわち、社会言語学的な、いわゆる「言語変種 (“variety”）」に関する理論との連合要請によってである。Fowlerによれば、言語というものは、「統一化された実体」といったものなどではなく、形式の点で様々に差異化された、「言語変種の集合」であると考えられ、また、その結果として、文学作品をも含めたあらゆるテキストというものは、その根本において等しく単数、あるいは複数の「言語変種」から構成されていることになる。要するに、「言語変種」の理論とはまず第一に、彼が“‘poetic language’ fallacy”と呼んで非難した誤謬に対して対抗させて提出されているのであるが、重要な点は、「言語変種」が相互に差異化されているのが、形式の面だけではなくて、意味の面においてもそうであり、しかも、そういった差異化は、「言語変種」個々が関係している文化の層それぞれの要求に応じて具体化されているということである。つまり、「言語変種」の形式的な構造というものは、その意

味的な構造との関連において、それを好んで使用する「言語社会 (“speech community”）」というものが、正当かつ公正と認めた、「リアリティに関するある種の見方」、つまり、俗にいう「イデオロギー」というものを不可避的に内部にコード化しているのであり、そして、ここにおいてこそ、Fowler にとっての Halliday の意味機能論というものの必要性が出てくる。すなわち、Fowler にとっての批評とは、諸々の「イデオロギー」というものが、「読者の意識から隠されている」、そういった状態そのものを暴露すること、要するに、“demystify” するということにあるのであるが、その際 Halliday の、いわば「機能が構造を決定する」とする理論は、「イデオロギーというものを、それを内部にコード化している言語構造というものから抽出する」、そのための極めて有効な、いわゆる “semantic system” として欠くべからざるものとなり得ると、Fowler は言うのである。

そのようにして、Fowler にとっての Halliday は、今やかつての Chomsky と同じような位置を占めることとなり、言語上の「(意味) 機能」と「言語変種」とに関する理論とは、いわゆる “sociolinguistic poetics”, あるいは, “sociolinguistic stylistics” というものの、確固たる核として貢献し得るものとみなされている。そして、そのような理論を中心とした基本的な枠組こそは、実際、今現在において ‘linguistic criticism’ というものの到達している、最も先端的な姿を示すものに他ならないのである。

6

以上、我々は、Roger Folwer の ‘linguistic criticism’ というものについて、彼の著作のうちの三冊、すなわち、*Linguistics and the Novel*, *Literature as Social Discourse*, および *Linguistic Criticism* の三冊を取り上げ、それらと小説の文体論、あるいは、小説の「詩学」との関係というものに特に焦点をあてて見てきた。その結果として、我々は、それらにおける議論のいずれもが、方法論に関する概略的な提案の域を出ておらず、具体的な分析例にしても、同様にしてほとんど断片的なものばかりであったということを認めなければならない。しかしながら、我々にとってとりあえず重要なのは、彼の理論が文体論全般とその関連領域において、どのような位置を占めているかということについてであり、そしてまた、彼が自らの理論に対して、小説の「詩学」としてのどのような方向性を与えているかという問題についてであった。とすれば、そういった本稿における議論の目標からして、上記三冊の著作の内容というものは、少しも不十分なものではないと言わなければならない。従って、以下において我々は、それら彼の著作を改めて見返して見ることにより、本稿における議論に一応の決着をつけることにしたいと思う。

結論の要点については、あらかじめ本稿のタイトル自体に示されている。まず第一に、‘linguistic criticism’ というものが「詩学」に対して、それをいわば《平準化 (“levelling”）」しようとしているということについて。簡単に復習をしておくと、*Linguistics and the Novel* における ‘linguistic criticism’ というものは、変形生成文法を中心にして、構造主義やフォルマリズム、あるいは ‘New Criticism’ といった関連諸領域と、その基本原則において連同しようとしていた。つまり、その極端な形式主義と「テキスト内」に殊更にとどまろうとする態度という点においてである。ところが後の二冊は、そういった基本原理とは正反対の方向へと向かおうとしている。つまり、“langue” の研究というよりはむしろ、“parole” の研究

へと、“(linguistic) competence”の研究というよりはむしろ、“(linguistic) performance”の研究へと、あるいは、“(linguistic) universal”の研究というよりはむしろ、“(linguistic) variation”の研究の方向へとといった具合にである。それが証拠に、‘linguistic criticism’というものがそれらにおいて依りどころとしている言語学は、‘sociolinguistics’というものであり、また、関連領域としては、社会全体に関する「マクロ構造的な視点」というものを提供してくれる、いわゆる「社会学」や類似の理論といったものが、まず第一のものとして想定されている。すなわち、上で述べておいたように、‘linguistic criticism’というものは、今や文学というものを根本的に、“text”としてではなく、“discourse”として研究しようとしているのであるが、忘れてはならないことは、例えば *Literature as Social Discourse* において、「文学というものは一種の言説である」と言う時、「文学 (=小説)」というものが、本来的には「世俗的な制度」にすぎず、従って、広い意味における、他の「非文学的」な言語活動と、まさしく「同列」に扱われてしかるべきであるということの意味していることに対してである。なぜならば、Fowlerにとって、今やその批評活動において自らの究極の目標とするところは、「文学とその他の言説様式との間に設けられてきた、人工的で問題含みのバリアに対して攻撃を加える」ことにより、「文学という制度そのものを、(誰からも)近づき易いものとする」と、要するに、「(小説の)詩学」という概念自体を、《平準化》するということにあるからである。

言うまでもなく、そのようにして《平準化》されてしまった「詩学」というものは、もはや「詩学」とは呼べないのではあるが、Fowler自身はというと、一貫して自らの理論体系というものについて、あくまでもそれが「詩学」として主張している。すなわち、‘linguistic criticism’というものについて我々が注目をしなければならない第二の点は、それが更には、「平準化」の《詩学》というものをめざそうとしているということに対してである。そのような彼の態度が最もよく現われているのは、役に立てば何でも取り入れていこうとする、その極めて貪欲な「折衷主義」においてである。つまり、一方においては、例えば、Hallidayのような「機能主義」の言語学者の主張や、あるいは、Althusserのマルクス主義的な理論といったものを今や批評の枠組の中心に据えながら、他方においては、変形生成文法とか、例えば構造主義者のGreimasの理論とかといったものが、それらと奇跡的に調和しつつ、なおも有効に働き得るものと彼は考えているのである。要するに、彼自身としては、少しも「路線変更」などはしていないのである。すなわち、今ややり方としては根本的に否定されているはずの「類推」という方法によって、文言語学において提案されている「構造の範疇」といったものを「援用」しようとした、*Linguistics and the Novel*における、‘text-linguistics’の構想というものはなおも生きており、同様にして、‘New Criticism’も構造主義もフォルマリズムも、依然として有効に連同し得る関連理論としてあるのである。しかしながら、実際、そううまくいくはずはないのである。なぜならば、「詩学」としての‘linguistic criticism’というものは、今や取り返し方がないまでに、《平準化》されているのであるが、他方、「詩学」というものは本質的に、文学と他の言語活動との間に様々な差異を設けたがるものだからである。つまり、‘linguistic criticism’というものが、唯一なおも《詩学》と呼べるとするならば、例えば、今もその批評の枠内にあるとされる変形生成文法が、批評と言語学とは、Jakobsonらによる「類推」といったやり方ではなくて、「文字どおり直接的」に係わるべきであるとする《平準化》の論理により、その理念としての孤高な

ユニークさといったものに関しては完全に無視されて、結果的には、単なる分析技法の一つとしての地位に貶められているといった事情からも明らかなように、構造主義であろうが、フォルマリズムであろうが、取り入れられるものは何もかも、完璧に「平準化」してしまう、いわば「平準化」の《詩学》としてだけなのである。

では、なぜそのようにして Fowler は、一見して明らかに理不尽とも思えるような考え方をするようになってしまったのであろうか。それにはいろいろと理由が考えられるのであるが、まず第一に、1920年から長きにわたって支配的であった文学作品を自律自足したものとみなす批評傾向に対して、彼がいろいろ加減うんざりしていたということをその原因として挙げなければならないであろう。つまり、文学というものが歴史的な存在であり、社会の産物であるということ、あるいは、文学それ自体が、一個の社会的な力を有しており、廻りの世界に対して弁証法的に影響を与えているといったことは、彼にとっては理屈以前の、疑問の余地のない経験的真実であったということ。第二に、Fowler 自身の、いわばイデオロギー的な偏向に原因しているということ。すなわち、彼は、その言葉の端々において、明らかなブルジョア（＝エリート）攻撃的な態度を示しており、そして、そういった態度こそが、先に言及したような、「バリアを取り除く」といった具体的な《平準化》宣言となって現われたりしているのであるが、要するに、“poetic language”とか、“literariness”とか、“literary competence”とかといったものは、Fowler にとっては何よりも、「テキストの生産と消費とに関する特別な訓練を受けたエリート」だけに、「文学という制度への介入」を許そうとする極めて排他的な、そして、その意味においては極めて危険でもある、一つのイデオロギー的な態度の現われというものに他ならないのであり、そして、それらに対してあまりにも激しく抵抗した結果として、彼自身、そのイデオロギー的な側面において、同じくらい強烈に偏向してしまったのではないのかと思われるのである。

しかしながら、そういったことよりも更に重要なのは、これから挙げる二つの要因に関してである。まず第一に、文体論自体の問題としての要因というものに関して。つまり、言語学プロパーの立場に立ったアプローチを採るにしても、あるいは、例えば構造主義やフォルマリズムのように、文芸論プロパーによる言語学的なアプローチを方法として採るにしても、文体論というものはいずれにしろ、対象である文学との間に常に多かれ少なかれ、「トワイライトゾーン」とでも呼ぶべき、決して触れられないことのない「間隙」を残してきたということ。その直接の原因としては、言語学が受け継ぎ、構造主義やフォルマリズムが積極的に取り込んできた Saussure の言語理論の根本について、それを特徴的に示している、いわゆる「二項対立」という方法そのものにあるように思われる。つまり、「二項対立」という方法には、確かに一種独特な魅力をもった美的快感というものが備わっているのではあるが、同時に、そういった美しさには、往々にして一つの罣が潜んでいるということ。すなわち、物事の本質というものは、それがどんなに美しくても常に単純化というものを拒み、また、それを平気で裏切るものなのであるが、とすれば、そういった文体論の方法の、一見精巧に見える「二項対立」的な合理化（＝単純化）の「美しい」網の目にしても、文学や文体といったものの本質は容易にそれをすり抜けてしまい、そして、他方においては、決して言及されることがない「間隙」が残されてしまうということになるのである。要するに、Fowler が上記のような考え方をするようになってしまったのは、文体論やその他類似の言語学的批評全般が根本的にはらんでいる、そのような欠陥に対する彼独自の過激な「異議申し立て」

の現われではなかったのかと言いたいのである。すなわち、「詩学」というものを理念としては否定しつつ、なおかつ、それを方法としては取り込んでいくといった“ambivalent”な態度を故意に取ることにより、自らも *Linguistics and the Novel* において実地に試してみても経験済みであるはずの、「二項対立」という方法にとっては宿命であるとも言える。批評上の「間隙」というものをどうあっても埋めるべく、そのことを文体論全体に対して過激に宣言しているのではないのかと言いたいのである。

第二に、小説がその根底において備え持つことになった、ある種の扱い難い性質との対決という問題から起因するものとしての要因について、今更言うまでもなく、ジャンルとしての小説は、その誕生以来固有の「詩学」というものを持たなかった。しかしながら、この一種欠陥とも思える卑俗さこそが、小説自身にとっては、実は幸運であり、強みでさえあったのである。つまり、小説は、そういった根なし草的な性格を、逆説的に唯一自らの《詩学》であるとして開き直すことによって、問題を常に批評の側だけに押し付け、そして、自らはむしろ自由気儘に動き廻り、その結果として、他に比べものがない程の発展を遂げてきたのである。他方、その宿命として、どうあっても何らかの形のレトリックでもって、合理的に芸術を縛りつけなければならぬ批評の方はというと、そのようにして小説が内に備え持つことになった性質、つまり、批評の側のレトリックを逆手に取って、まるでカメレオンのように巧みにその束縛から逃れてしまうという、厄介な一種の「免疫機能」に対して、恒常的に悪戦苦闘を続けなければならない羽目に陥ってしまったのであるが、Fowler が、「詩学」の《平準化》という試みから、「平準化」の《詩学》という更に過激な試みへと向かったのは、そのようなジャンルとしての小説の側の、そして、批評の側が「詩学」という概念自体を、殊更に「特権化」することによってこれまで暗に野放しにしてきた、ある種「理不尽」な扱い難さに対する、彼なりの「挑戦」であったとも考えられるのである。つまり、《平準化》された「詩学」というものを、なおも《詩学》であるとして主張することによって、Fowler は、そういったジャンルとしての小説の側の、「理不尽」な扱い難さというものの根本的な原因となっているところの、厄介な「免疫機能」のメカニズムの本質を、「平準化」という方法自体において、「無効力なもの」として「再生産」しようとしているのである。

以上の二点、つまり、方法としての「二項対立」とその後に残される一種の「トワイライトゾーン」という問題と、ジャンルとしての小説が本質的に備え持つことになった「免疫機能」と批評との関係という問題は、Fowler のような文体論者だけに限らず、小説を論じる者すべてにとって、多かれ少なかれ根源的な問題であると考えられる。つまり、個々の小説作品についてどのような観点から論じるにしても、批評というものは、小説というジャンルに固有である、一種の「免疫機能」という「障害」に対して、何らかの形で必ずやそれを乗り越えてみせなければならないのであるが、その際、そういった障害の越え難さ自体を、例えば「内容」と「形式」という、あいまいな、ということつまり、そういった意味においては極めて便利でもある、一つの「二項対立」に対して、表立って、あるいは表面下において秘かに還元し、他方、決して解決されることのない「トワイライトゾーン」というものが後に残ることに対しては、それを平気で無視して見送り、そして、そのような結果として、一種美的でもある知的操作の、しかしながら、その本質はというと疑いもなく偽りのものでしかない快感を得ようとするのか、あるいは、そういったやり方が明らかに見逃している事実項目に対して着目し、批評の「トワイライトゾーン」へと積極的に踏み込むべく、それと

は対照的に何らかの形で「テキスト外」へと飛び出して、その結果として、例えば Fowler のしたように、芸術（小説）対批評というそもそもの問題自体を、「詩学」というものに必然的に纏わっている排他的なエリート主義対批評という別の問題に置き替えることにより、小説というジャンル共々その厄介な「免疫機能」そのものまでも、結局は、救い難いまでに「平準化」してしまうといった、より過激ではあるが、所詮はジャンルとしての小説に対して、それを一時的に「幻惑」することにしかならないと思われる、これまた、決して決定的とは言えそうもないような解決の方向に向かうのかという辛い選択に、誰れしも迫られているように思われるのである。重要なのは、その際そういった選択自体を避けようとして、単に両者を結び付けるだけでは許されないということであり、そして、実際 Fowler は、上で見てきたような、その矛盾に満ちた一連の活動を通じて、そのことを逆説的に証明してくれているのである。要するに、我々に唯一残されている道は、そのような二つの選択肢というものを、何とかして、いわば「螺旋状」に一本化していくような方法を見つけ出すことだけなのであるが、しかし、そのような一見してもっともらしく殊勝に聞こえる決意表明さえも、その実体はというと、結局は、小説と批評との間を隔ててしまう、単なる一個の「比喩」でしかないのかもしれないということもまた、同時に Fowler によって、暗に警告されていることなのではあるが。

使用テキスト

- Fowler, Roger. *Linguistics and the Novel*. London : Methuen, 1977.
 *Literature as Social Discourse*. London : Batsford, 1981.
 *Linguistic Criticism*. Oxford : Oxford Univ. Pr., 1986.

参考文献

- Althusser, Louis. "Marxism and Humanism." In *For Marx*. Trans. Ben Brewster. London : New Left Books, 1977, pp. 219-47.
 "Ideology and Ideological State Apparatuses." In *Lenin and Philosophy*. Trans. B. Brewster. London : New Left Books, 1971, pp. 121-73.
 Austin, J. L. *How to Do Things With Words*. London : Oxford Univ. Pr., 1962.
 Bakhtin, M. *Problems of Dostoevsky's Poetics*. Trans. R. W. Rotsel. Ann Arbor : Ardis, 1973.
 Barthes, R. *Mythologies*. Trans. A. Lavers. London : Cape, 1972.
 Berger, P. L. and Luckmann, T. *The Social Construction of Reality*. Harmondsworth : Penguin, 1967.
 Bernstein, Basil. *Class, Codes, and Control*. Vol. I. London : Routledge and Kegan Paul, 1971.
 Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. Chicago : Univ. of Chicago Pr., 1961.
 Chatman, S, ed. *Literary Style : A Symposium*. New York : Oxford Univ. Pr., 1971.
 ed. *Approaches to Poetics, Selected Papers from the English Institute*, 1972. New York : Columbia Univ. Pr., 1973.
 Chomsky, Noam. *Syntactic Structures*. The Hague : Mouton, 1957.
 Culler, J. *Structuralist Poetics*. London : Routledge and Kegan Paul, 1975.
 van Dijk, T. A. *Some Aspects of Text Grammars*. The Hague : Mouton, 1972.
 Eagleton, Terry. *Criticism and Ideology*. London : New Left Books, 1976.

- Eco, Umberto. *A Theory of Semiotics*. London : Macmillan, 1977.
- Fowler, R. et al. *Language and Control*. London : Routledge and Kegan Paul, 1979.
- Freeman, Donald C., ed. *Linguistics and Literary Style*. New York : Holt, Rinehart and Winston, 1970.
- Giglioli, P. P., ed. *Language and Social Context*. Harmondsworth : Penguin, 1972.
- Greimas, A. J. *Sémantique Structurale*. Paris : Larousse, 1966.
- Halliday, M. A. K. "Language Structure and Language Function." In *New Horizons in Linguistics*. Ed. J. Lyons. Harmondsworth : Penguin, 1970, pp. 140-65.
- *Language as Social Semiotics*. London : Edward Arnold, 1978.
- Jakobson, R. "Closing Statement : Linguistics and Poetics." In *Style in Language*. Ed. T. A. Sebeok. Cambridge, Mass.: MIT Pr., 1960, pp. 350-77.
- Labov, W. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia : Pennsylvania Univ. Pr., 1972.
- Mukařovsky, Jan. "Standard Language and Poetic Language." In *A Prague School Reader on Aesthetics, Literary Structure and Style*. Ed. & Trans. P. L. Garvin. Washington D. C.: Georgetown Univ. Pr., 1964, pp. 17-30.
- Propp, Vladimir. *Morphology of the Folktale*. Trans. L. A. Wagner and A. Dundes. Austin : Univ. of Texas Pr., 1968.
- Searle, John R. *Speech Acts*. London : Cambridge Univ. Pr., 1969.
- Shklovsky, V. "Art as technique." In *Russian Formalist Criticism*. Eds. & Trans. L. T. Lemon and M. J. Reis. Nebraska : Univ. of Nebraska Pr., 1965, pp. 5-24.
- Todorov, Tzvetan. *The Poetics of Prose*. Trans. R. Howard. Ithaca : Cornell Univ. Pr., 1977.
- Uspensky, Boris. *A Poetics of Composition*. Trans. V. Zavarin and S. Wittig. Berkeley : Univ. of California Pr., 1973.
- Whorf, B. L. *Language, Thought and Reality*. Ed. J. V. Carroll. Cambridge, Mass. : MIT Pr., 1956.
- Williams, Raymond. *Marxism and Literature*. Oxford : Oxford Univ. Pr., 1977.